

「愛」いろいろ

なかむら
中村

ゆずる
譲

日本教職員組合・書記長

私は大のジャイアンツファン。小学生のときは、当時の巨人のエース中村稔さん（名前が同じで、私にとってのヒーローだった）の背番号26を着けていた。キャッチャーの友人には森捕手の27番を無理やり着けてもらった。振り返ると赤面ものではあるが、懐かしい思い出である。そこまで巨人が好きだった。

原監督が「ジャイアンツ・愛」を語り、チームを引き締め、ファンの喝采をあびる。うれしい限りである。しかし世の中には阪神ファンもいれば、楽天ファンもいる。その人たちは「ジャイアンツ・愛」を語られて嬉しいだろうか？ 私の知り合いに熱烈な阪神ファンの労組委員長がいる。彼は、背広の裏地を阪神の縦縞のユニフォームにしている。それも2着。その人に向かって、「ジャイアンツ愛、いいでしょう！」などと恐くて言えない。12球団へのファンの愛でプロ野球は成り立っている。

同じことが政治の舞台で始まっている。小泉劇場の最終幕である。教育基本法の「改正」問題。攻める側は70回も作戦会議を開き、用意周到に準備をしてきた。どんなボールを投げるのかと構えていたら、意外や軟投である。愛国心を説く人たちだから、きっと豪腕で魂を込めた150キロのストレートがドスンとくるのかと構えていたら、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とある。ゆるい曲球だ。

国民が望んでいるのは豊かな成熟した社会。

平たく言えば、余裕があって、のんびり生きていける社会。年金掛金の未払いの時、「会社もいろいろ」、靖国神社参拝の時も「心の問題」と得意のワンフレーズで答えていたのは小泉総理大臣、あなたでしたよね。心の自由は権力者の特権ですか。国民十人十色。いろいろあっていいんですよね。

「愛」を法律に書き込み、教えることで、だんだんと価値観が一元化され、いろいろな「愛」から定冠詞のついた「ザ・愛」（文科省が決める？）になる心配がある。過去にその歴史がありました。日本は法治国家だから、ルール、解釈は法律による。なんとも息苦しい世の中になりそうですね。

郷土愛も人それぞれ。自然に心に湧き上がる暖かい感情である。大切にしたい。しかし法律に書き込むとなると別問題。ベストセラーの「国家の品格」を読みました。ナショナリズムとパトリオティズムの違いがわかりました。混同してはいけないことを藤原正彦さんから学びました。でも、それは藤原さんの考え方。現実にはそんなに厳密に分けられないのではないのでしょうか。確かイラク戦争の時、アメリカの迎撃ミサイルは「パトリオット」という名前じゃなかったのでしょうか。

イギリスの世論調査（05年7月）で「イギリスの伝統と何ですか」の答えで一番多かったのが「自由にモノが言えるところ」。伝統もいろいろ。愛もいろいろ。